令和３年度　自己評価・学校関係者評価　報告書

岐阜県立長良特別支援学校	学校番号	１０３

自己評価

学校教育目標	１　校訓（目指す児童生徒の姿） 「仲よく　明るく　たくましく」 ２　教育目標（目指す児童生徒の姿を実現するためにどのような教育を行うのか） 児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育活動を推進し、こころ豊かにたくましく主体的に生きる力を育成する ３　私たちのスローガン（校訓・教育目標を端的に表した言葉） 「元気な病弱教育」 （１）この学校で学ぶことで、児童生徒を元気にしていきたい （２）そのためには、保護者も元気にしていきたい （３）そのためには、私たち教職員も元気に働きたい （４）力を合わせて、学校も地域も元気にしていきたい ４　今年度の教育の重点 （１）児童生徒を守りきる安心・安全な体制の整備・推進 （２）人とのかかわりを通して、豊かな表現力、自己肯定感を育てる教育の推進 （３）確かな学力と生きる力を身に付けることができる病弱教育の充実 （４）病弱教育の理解啓発の推進

部	小学部
現状及びアンケートの結果分析等	・オンライン授業の実施等のＩＣＴ機器の活用によって、同時双方向による児童と教員の関わりの中で個別の学習を進めることができた。 ・ＩＣＴ器使用時における児童の実態や活動場面ごとのメリット、デメリットを明確にし、より有効な使用方法や環境整備について検討し実践を重ねていく。 ・学習指導要領の「主体的、対話的で深い学び」を目指して授業改善を行うことで、学習や学校生活の中で児童が自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする姿がみられたが、コロナ禍により十分な場を設定することができなかった。 ・学習グループ内において、指導内容の明確化や学習記録の共有化によって指導方法の改善を図ることができた。 ・部集会や他校との交流活動において、積極的にWeb会議システムを活用することで、離れていても同じ活動の時間を共有し互いを意識することができた。 ・保護者や関係機関等と連携して情報交換を行ったことで、課題や支援の内容が明確となり、必要な支援を的確に実施することができたため、今後も取組を継続していく。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	⑴学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現していくための授業改善を積極的に行う。 ⑵児童の実態に応じた合同学習、他校との交流学習を計画的に実施することで、児童相互のかかわりを広げる。 ⑶保護者や関係機関と連携して、家庭や地域等において児童の生活が広がる支援を目指す。
重点目標を達成するための校内組織体制	・学級及び学習グループ会と、グループ長・分掌長等の企画会を実施する。 ・安全・安心に教育活動を送るための家庭・病院等・保健室と連携する。 ・部内の各分掌担当者の積極的な連携、業務の推進を行う。
目標の達成に必要な具体的取組	⑴学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現していくための授業改善を積極的に行う。 ①学習指導要領に基づいて「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善を積極的に行う。 ②Dグループの図画工作・音楽について、教科の観点に基づく評価を行うための指導内容や指導方法の検討を行う。 ③ 児童の実態ごとのオンライン授業実施によるメリット、デメリットを明確にし、改善方法を検討し実践する。

	⑵児童の実態に応じた合同学習、他校との交流学習を計画的に実施することで、児童相互のかかわりを広げる。 ①異なる学習グループの児童相互のかかわりが広がるようグルーピングを工夫し、ＩＣＴを活用しながら合同学習を進めたり行事に向けた取組や休み時間の活動を行ったりする。 ②交流学習にweb会議システムを積極的に活用することで、他校の児童との交流の機会を多く設定する。 ③訪問教育児童の学校や居住地校でのスクーリングを安全・安心に計画的して実施する。 ⑶保護者や関係機関と連携して、家庭や地域等において児童の生活が広がる支援を目指す。 ①個別の教育支援計画に基づいて、本人・保護者の願いやニーズを踏まえ、ねらいを教員間で共有しながら教育活動に取り組む。 ②医療、福祉関係等の外部機関と連携して、児童のQOL向上を目指したキャリア形成支援を行う。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	⑴学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現していくための授業改善を積極的に行うことができたか。 ⑵児童の実態に応じた合同学習、他校との交流学習を計画的に実施することで、児童相互のかかわりを広げることができたか。 ⑶保護者や関係機関と連携して、家庭や地域等において児童の生活が広がる支援を目指すことができたか。
取組状況・実践内容等	⑴・一人学級では、課題に対してＩＣＴ機器等を活用し、いろいろな角度からの情報や考え方を提示し、教員と対話をしながら学習を進めた。 ・児童同士が互いに思いを伝え合ったり、相談して決めたりする場面を様々な教科・領域において設定し、児童の様子を教員間で振り返り共有して次の支援に生かした。 ・Ｄグループでは、児童の実態に合わせた図工や音楽の活動内容を設定し、無理なく児童が主体的に参加できる場面を増やした。 ⑵・オンラインで居住地校の児童との交流や、近隣校との学校間交流を実施した。 ・学部集会（わくわくタイム）や出前授業等で他グループの児童とオンラインでの合同学習を行い、交流活動や制作活動を実施した。 ・Ｅグループでは、スクーリングの代わりにオンラインでＤグループの音楽の授業に参加した。 ⑶・毎回の懇談で保護者と個別の教育支援計画や指導計画を確認し、グループ内でも情報を共有して支援を行った。 ・外部専門家の支援を受け、ベッドサイド学習の児童を含め、今後の支援内容を明確にして取り組んだ。 ・入所生の活動について、病院に事前に相談し協力を得て実施した。

評価の視点	評価
⑴学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実現していくための授業改善を積極的に行うことができたか。	A Ⓑ C D
⑵児童の実態に応じた合同学習、他校との交流学習を計画的に実施することで、児童相互のかかわりを広げることができたか。	Ⓐ B C D
⑶保護者や関係機関と連携して、家庭や地域等において児童の生活が広がる支援を目指すことができたか。	A Ⓑ C D

成果・課題	総合評価
⑴〇ＩＣＴ機器の活用や教師との対話によって自分の考えを深めながら主体的な姿勢で学習に取り組むことができた。 〇友達の発言を聞いて自分の考えを深めて意見を発表する経験を重ねることで、伝えたい事柄を考え言葉で表現する力を高めることができた。 〇Ｄグループの図工・音楽では、教科の段階の評価の観点及び趣旨を踏まえ、児童の実態に合わせた授業内容、支援方法を検討し実践することができた。 ▲コロナ禍により校外学習を実施できないことがあり、校内では難しい体験的な活動を十分に行えないことがあった。 ⑵〇居住地校の友達に会えることを楽しみにしながら準備や当日の活動に意欲的に取り組む姿がみられた。 〇オンラインで同じ時間に活動を共有することで互いを意識し認め合い、小学部の仲間であるという一体感	A Ⓑ C D

を醸成することができた。 〇他学級の友達とかかわることのできるオンラインでの合同学習を楽しみにし、積極的に交流を深めることができた。 ▲オンラインによる活動の実施は、通信環境や使用機材によって大きく活動が左右されるため、常によりよい実施方法について検討していく必要がある。 ⑶〇グループ内での共通理解によって適切な課題の選択や具体的な支援に生かすことができた。 〇専門家の視点からアドバイスを得られ、支援の有効性と今後の見通しを確認し、自信をもって支援にあたることができた。 〇病院とはオンラインの行事や集会等の取組や使用教材等、事前に説明し許可を取ることで、安全に充実した取組ができた。	
来年度に向けた課題と改善方策案	・コロナ禍における感染症対策に留意した校外学習等の効果的な実施方法やその代替となる活動内容について検討する。 ・ＩＣＴ機器（視線入力、スイッチ等）の活用について、オンライン授業に限定することなく、学校生活全般で活用できるように取り組む。 ・訪問教育の児童の割合が増えてきており、児童の実態に合わせた部集会等の実施方法について検討する。

部	中学部
現状及びアンケートの結果分析等	・教職員が協力して感染予防等の環境整備に努めてきた。継続する中、慣れからくるミスを防ぐために、チェックリスト活用やお互いの言葉掛けを大切にする。 ・学習活動においては、感染対策を講じることによりある程度の校外学習や販売活動等が可能であった。今後もこうした体験的な学習を大切にして、生徒が実践活動から学ぶ機会を保障していく。 ・オンライン部集会や授業は、大集団の中では十分に出せなかった力を発揮できた生徒がいたり、訪問生のリアルタイムでの参加が可能となったりした。また、コロナ禍での対応として、自宅待機等をする生徒にとっては学ぶ機会の保障や精神的な安定につながったので、今後も積極的に活動として取り入れていく。 ・ＩＣＴ機器の活用は、生徒に活動の幅を与えることができる。 ・教職員や保護者、専門家の連携により、生徒の小さな変化の共有や生徒が気持ちを話せる場の設定等につながったので継続することが大切である。 ・生徒の実態に応じた生活力の育成を図るためには、教職員の病弱教育の専門性向上や積極的なＩＣＴ機器の活用が大切である。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	⑴生徒が心身共に健康で安全な生活を送るための環境整備をする。 ⑵多様な実態の生徒が、個々の表現方法で気持ちを相手に伝える力を育てる。 ⑶生徒が実態に応じた社会生活を営むための知識や技能の習得を図る。
重点目標を達成するための校内組織体制	・教職員が部会やグループ会や分掌会等において、生徒の情報を常に共有し、一人一人に応じたきめ細かい支援を組織として行えるようにする。 ・安全面に対する意識や環境整備の状況について部会や朝礼等でこまめに確認する。 ・職員の専門性向上に向け積極的に研修が受けられるよう、部内職員間で協力し合い、関係分掌とも連携しながら進める。
目標の達成に必要な具体的取組	⑴生徒が心身共に健康で安全な生活を送るための環境整備をする。 ①感染症対策として基本的衛生管理を各係と連携し、教室の衛生管理をする。 ②生徒が病気理解や感染症予防ができるよう学習を行うとともに、自宅待機等が必要な場合の生徒に対する精神的な支援をオンライン授業等を通して行う。 ③教室内の教材備品等の配置や掲示の工夫により、生徒が安心して活動できる環境を整える。 ⑵多様な実態の生徒が、個々の表現方法で気持ちを相手に伝える力を育てる。 ①あらゆる教育活動で生徒が自らの思いを表現できる機会を設定したり、タブレット端末等の活用で表現ができたりするよう、専門家とも連携し取り組む。 ②感染対策を十分に行い、行事や校外学習またはオンライン学習等の体験的な学習を通して、人との関係作りや自分の考えの伝え方等を学べるようにする。 ③教職員と保護者、専門家が生徒の実態や課題の情報共有、共通の支援を行う。 ⑶生徒が実態に応じた社会生活を営むための知識や技能の習得を図る。 ①教職員が教科や自立活動等の専門性向上に努め、生徒の興味・関心や主体的な姿を引き出す活動を模索

	し実践する。 ②「個別の指導計画」「年間指導計画」等を活用し、生徒の課題や評価の仕方について教職員間で情報共有し実践に活かす。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1)保護者や専門家等と連携し、生徒の小さな変化への対応ができたか。 (2)生活に必要な知識や技能が個の実態に応じて身に付くよう支援ができたか。 (3)教職員が生徒支援の専門性向上やＩＣＴ機器等の積極的な活用ができたか。 (4)教室の衛生管理や生徒が落ち着ける掲示等の環境整備ができたか。 (5)感染症対策を適宜行い、体験的な学習を通して人との関係作りや自らの思いを表現できる機会等の整備ができたか。 (6)「個別の指導計画」等を活用し、教職員が生徒の情報を共有し、実践に生かすことができたか。
取組状況・実践内容等	(1)・生徒の実態や状況に応じて保護者や保健室、生活支援部と連絡を取り合ったり、専門家支援を活用したり、担当医と連絡をとったりして、安全で安心した学校生活を送ることができるよう協力し、日々の生徒支援を行った。 ・手洗いや消毒、換気をして感染予防対策をし、教室内には不要なものを置かずに生徒が学習に集中できるよう、環境整備を徹底した。 ・必要に応じて、ついたてやカーテンを利用して、生徒が活動に集中できるようにした。 (2)・生徒の舌や眉の動き、心拍の変化等を授業の中で観察したり、表情や言動に注目したりして、発達段階に合わせた表現を担当教員で情報を分析・共有し、生徒に寄り添った授業を実践した。 ・ｅスポーツ大会をきっかけに、未活用だったスイッチやアプリを知り、その後の授業にも活かした。また、オンライン授業での共有画面操作やビデオ編集ソフトの活用をして自宅学習や居住地校交流を効果的に実施した。 ・部集会はリモートで行い、通学生での持ち回りで司会をした。中学部全員をオンラインでつなぎ、学習場所が異なっていてもつながりを感じられる時間を作った。 (3)・感染対策を熟慮して校外学習を実施したり、校内活動に変更して火起こし体験や草木染め体験を実施したりした。 ・生徒の実態に応じてキャリア学習や環境学習を進めた。教科学習では、生徒の理解や体調に応じて授業の進度を変更し、内容を精選して進めた。 ・前期末、後期末に教科担当者が集まり、個別の指導計画等を活用して生徒評価や情報交換をして共通理解し、個の課題に迫る支援について考えた。

評価の視点	評　価
(1) 生徒が心身共に健康で安全な生活を送るための環境整備ができたか。	A (B) C D
(2) 多様な実態の生徒が、個々の表現方法で気持ちを相手に伝える力を育てることができたか。	(A) B C D
(3)実態に応じた社会生活を営むための知識や技能の習得を図ることができたか。	A (B) C D

成果・課題	総合評価
(1)〇実態に応じて、保護者と連絡を取り合ったり専門家支援を活用したりして、ニーズの把握や生徒支援ができた。保護者との連携において登下校時間の有効活用ができた。 〇活動場所や学習方法を工夫し、感染症対策をとりながら学習活動ができた。 ▲専門家支援相談日に生徒が登校できないこともあるので、予め生徒の活動動画を撮っておいたり、別の学級生徒の相談に切り替えたりする。 ▲生徒の荷物が多く、教室内の整理整頓が大変で教室の狭さを感じた。 (2)〇訪問の生徒もスイッチやアプリを活用した表現活動を行うことができた。 〇リモートでの部集会では、中学部全員でのつながりをもつことができ、仲間を意識し、相手を思いやることを学ぶことができた。 ▲部集会や学習活動において、感染予防対策のため、直接会って交流することができなかった。人と人とのかかわりがよりもてるリモートの活用方法や掲示物等の工夫を継続して行っていく。 (3)〇目指す姿と具体的な手立てを教員で共有して生徒対応をすることができた。 ▲昨今の感染状況からプライマリー懇談や訓練参観ができない状況を鑑みて、毎月行っている病棟等との連絡会や担当者との打ち合わせを有効活用する。	A (B) C D

来年度に向けた課題と改善方策案	・コロナ禍における日常的感染対策の継続と予防対策をした学習活動の工夫を行い、安全対策をお互いに確認し合う。

	・気持ちの表現手段や、直接交流の困難さからもＩＣＴ機器指導力の向上を図る。 ・目標に向かう手だてや評価の仕方の共有をするために、職員間や保護者、外部機関ともより連携し、個別の指導計画等を積極的に活用していく。

部	高等部
現状及びアンケートの結果分析等	・生徒の病気や障がいの程度が異なり、身体機能、知的理解、コミュニケーション能力、基本的生活習慣、社会的経験等において多様な実態がある。 ・教員が指導法や授業力、専門性、資質の向上に努めるとともに、部全体の指導力が高められるよう教師個々の実態に合わせた研修会、伝え方、指導方法の共有をより図っていく必要がある。 ・情報の共有や危機管理等、組織としての意識を高くもち、十分に連携を行いながら支援にあたることが必要である。 ・保護者や関係機関との連携を大切にするとともに、生徒の家庭での状況を把握し、必要に応じて保護者と共に支援にあたることができる体制づくりを行う必要がある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1) 一人一人の病気や障がいの状態に応じた教育により、将来の社会生活や家庭生活、職業生活に必要な知識と技能、生活態度を身に付ける。 (2) 豊かな情操と個性ある表現力を身に付ける。 (3) 健康の保持増進と生活の安定を図る。
重点目標を達成するための校内組織体制	・生徒が安心・安全な学校生活、家庭生活を送ることができるように、家庭や関係機関との連携を図りながら、教員間の共通理解に基づいた危機管理意識の高い支援体制を確立する。 ・生徒が創造性豊かな自己表現を獲得し、社会性やコミュニケーション能力を身に付ける手だてとして、多様な体験・表現及び発表や交流の場面を積極的に提供する体制を充実させる。 ・生徒が確かな学力や進路実現に必要な基礎・基本を身に付けるべく、あらゆる教育活動において効果的な指導を行うため、教員自らが指導法の改善や専門性と資質の向上に努め、研修等から得た知識や技能を授業実践に生かすだけでなく知見の共有化を図り教員同士が学び合う組織を構築する。
目標の達成に必要な具体的取組	(1) 一人一人の病気や障がいの状態に応じた教育により、将来の社会生活や家庭生活、職業生活に必要な知識と技能、生活態度を身に付ける。 ①生徒が進路目標を明確にもち、やがては希望の進路を実現するため、教育活動のあらゆる場面でキャリア学習を進めるとともに、生徒の実態に応じて保護者や関係機関と緊密に連携し実施方法を工夫しながらキャリア実習や居住地域実習等を実施する。 ②確かな学力や社会人として必要な基礎・基本を身に付けるために、生徒が系統的で具体的に取り組めるよう３年間のキャリア学習の流れを明確にして指導に生かす。 ③困難さを伝える方法や喜び等の気持ちを表出する力、集団内での適切な言動を身に付けるため、オンラインを用いて人とかかわる機会を増やすなど、ソーシャルスキルや表現力の獲得を図る。 ④教員が研修や日頃の実践から得た知識や技能を互いに学び合う体制を築くため、様々な機会をとらえ知見の共有に努める。 (2) 豊かな情操と個性ある表現力を身に付ける。 ①多様な「みる・きく・ふれる・つくる」場を提供して、創造性豊かな制作や発表を行う。 ②表現（表出）力やコミュニケーション能力の伸長を図るため、ＩＣＴ機器や教具等を積極的に活用するとともに、新しい教材や指導方法の開発をする。 ③自己肯定感を高めるため、コンクールや検定試験、行事等への積極的な取組を支援する。 (3) 健康の保持増進と生活の安定を図る。 ①精神的に不安定な状態の生徒が自己理解を進め、自立に向けて前向きに考えることができるように、保護者の理解や協力を得て効果的で継続的な支援を行う。 ②生徒の健康状態の維持と生活環境の改善のため、外部の専門家や各関連機関と連携して保護者を支援するとともに、必要に応じてケース会議等を開催する。 ③生徒の安全を脅かすリスクの芽を早期に発見したり、緊急事態に適切に対処したりするため、ヒヤリハット事例の報告と蓄積を図るとともに、危機管理意識を高く保ち、常に全職員でホウレンソウを徹底して情報を共有する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1) ①生徒が明確な進路目標をもち、進路希望が実現したか。 ②学力が向上し、社会人として必要な基礎基本が身に付いたか。

	③ソーシャルスキルや表現力の伸長がみられたか。 ④教員が互いに学び合う体制を築くため、様々な機会をとらえ知見の共有に努めたか。 (2)①多様な「みる・きく・ふれる・つくる」場を提供して、創造性豊かな制作や発表ができたか。 ② ＩＣＴ機器や教具等を積極的に活用するとともに、新しい教材や指導方法が開発できたか。 ③コンクールや検定試験、行事の実施方法を工夫しながら積極的に取り組んだか。 (3)①保護者の理解や協力を得て効果的で継続的な支援を行ったか。 ②関連機関との連携を図ることで保護者を支援し、生徒の生活環境を改善できたか。 ③ヒヤリハット事例を蓄積し、常に全職員でホウレンソウを徹底して情報を共有したか。
取組状況・実践内容等	(1)・コロナ禍ということもあり集団における支援の場が少なく、個に応じた支援が中心となったが、生徒の卒業後を意識して、自立活動の指導目標・指導内容を設定して取り組んだ。 ・今年度も引き続きコロナ対応のため活動が制限されたが、オンラインの利用にも慣れ、生徒の実態や目標に応じた授業を行うとともに、他校の生徒とも交流できた。 ・生徒の実態や様子をグループや教科担当者間で確認・共有し指導・支援を進めることができた。 ・学校や家庭で安定した生活を送ることができるよう、常に生徒の様子を観察し、職員間での共通理解を図った。 (2)・部集会や金華祭、授業等でオンラインを活用することを想定しながら、動画や作品を制作したり発表方法や視聴方法を工夫したりした。 ・生徒の実態を把握した上で、新型コロナウイルス対策にも配慮し、安全安心の環境づくりを最優先にしながら生徒の表出を引き出すために、積極的にタブレット端末を活用した。 (3)・生徒の実態に合わせて自分自身を振り返ったりすることができるような場を定期的に設けた。また、困った時に外部機関に相談をすることができるよう支援を行った。 ・授業支援の専門家や外部機関（医師、看護師、理学療法士、臨床心理士等）と連携し、助言を踏まえて指導方法に取り入れたとともに、保護者や病棟スタッフとも連携して生徒の生活支援を行うことができた。

評価の視点	評価
(1)一人一人の障がいの状態に応じた教育により、将来の社会生活や家庭生活、職業生活に必要な知識と技能、生活態度を身に付ける支援ができたか。	A Ⓑ C D
(2)豊かな情操と個性ある表現力を身に付ける支援ができたか。	A Ⓑ C D
(3)健康の保持増進と生活の安定を図る支援ができたか。	A Ⓑ C D

成果・課題	総合評価
(1)〇一人一人の生徒に対してかかわる職員が集まって目標や成果、課題、支援の在り方等話し合うことができ、必要に応じてケース会議も実施することができた。 〇Metamoji ClassRoom を使用したことで、オンライン授業中での板書のやり取りや、教材の電子化をすることができた。 〇生徒の健康や問題行動に気を配り、保護者や同僚、各関係機関と連携を図って生徒理解を深めながら指導、支援することができた。 ▲コロナ禍ということもあり、生徒の実態把握が難しく、授業や支援の負担が一部の職員に偏りがみられた。 (2)〇オンラインでの金華祭、部集会や授業で生徒とかかわる場を積極的に設けたことにより、生徒間で自発的にかかわりをもとうとしたり、自分なりに工夫しながら自己表現しようとしたりする態度がみられた。 ▲動画を撮ったり、ＩＣＴを利用したりすることが目的にならないよう、活動の目的を明確にする。 (3)〇動画や写真を提示しながら専門家から助言を受け、支援方法について職員間で具体的なイメージを共有しながら日常の支援に生かすことができた。 ▲ベッドサイド授業では、生徒の体調が分かりづらいため、もっと病棟看護師から病棟での様子を聞くことができるとよい。	A Ⓑ C D

来年度に向けての改善方策案	・教員が指導法や授業力、専門性、資質の向上に努めるとともに、部全体の指導力が高められるよう教員同士が学び合う場を設けるなど、教員個々の実態に合わせた研修会、伝え方、指導方法の共有をより図っていきたい。 ・情報の共有や危機管理等、組織としての意識を高くもち、グループ長会を開催するなど十分に連携を行いながら支援にあたることができるようにする。 ・保護者や関係機関との連携を大切にするとともに、生徒の家庭での状況を把握し、必要に応じて保護者と共に支援にあたることができる体制づくりを行う。 ・誰もが学級を越えた支援ができるように、教員間で連携をとりながら高等部全体で支援にあたることができるようにするとともに、業務に偏りが起きたり負担があったりする場合は主事に相談する。

令和３年度　自己評価・学校関係者評価　報告書

岐阜県立長良特別支援学校

学校番号	１０３

分掌	教務部
現状及びアンケートの結果分析等	・個別の指導計画は教育課程ごとに実態や教科の特徴に応じて、より効果的な運用ができるように一部様式を変更した。引き続き「起点は評価から」をメインテーマとして、運用の在り方について探っていきたい。 ・指導要録や出席簿等について、これまで保管や運用についてマニュアル等の作成・改善を進めてきた。今後はその他の重要書類の管理等について、現状を見直し改善を進めていく必要がある。 ・昨年度はコロナ禍にあり、保護者や関係者が来校する機会が少なく、行事も形態を変えたり中止したりすることが多くなり、児童生徒の教育活動を具体的に知っていただくような機会が激減した。来校することができなくても、学校の取組、成果、児童生徒の生き生きとした活動の様子を発信できるような広報活動を考えていきたい。 ・コロナ禍において、ホームページのもつ役割がより重要になってきた。情報の公開に関して充実させるだけでなく、ホームページを通した情報の取得等についても現状を整理し、改善する必要がある。
今年度の具体的かつ 明確な重点目標	(1)それぞれの教育課程に応じた個別の指導計画について、記載内容や評価・改善に関する理念について理解促進を図るとともに、学校全体でその質を向上させることができるような運用方法を確立させる。 (2)各種重要書類等について、管理方法や運用に関するマニュアルを見直すとともに、適切な管理が継続できるようなシステムを構築する。 (3)ホームページや学校だよりなど、外部への発信をより分かりやすく充実できるよう、内容や方法について改善し実践する。
重点目標を達成する ための校内組織体制	・個別の指導計画について、これまでの実績を踏まえ分かりやすい例示や記載に関するマニュアル作成を教務部内で協力して進める。また、実用生の高い運用を目指し、各部において作成を主導する管理職との連携を深める。 ・重要書類等の管理、保管に関する校内での現状を把握するために各部、分掌と連携を図る。また、より適切な運用、管理、保管を目指し、管理簿やマニュアル等の改善や保管場所等の抜本的な見直しを進める。 ・学校として発信すべきことを整理し、ホームページが情報取得のツールとしての機能がより高まるよう各分掌等と連携を図る。 ・教育活動について臨場感のある発信を活性化できるよう、発信内容に関して各部、分掌との連携を図る。
目標の達成に必要な 具体的取組	(1)それぞれの教育課程に応じた個別の指導計画について、記載内容や評価・改善に関する理念について理解促進を図るとともに、学校全体でその質を向上させることができる運用を確立させる。 ①これまでの実績や課題を整理し、評価や改善等に関する好事例をまとめ、それぞれの様式のもつ役割とともに作成に関するマニュアルを作成する。 ②作成者に対する理解啓発だけでなく、管理職と連携し運用に関する課題を洗い出し、継続的な改善を行うことで実用的な運用を図る。 (2)各種重要書類等について、管理方法や運用に関するマニュアルを見直すとともに、適切な管理が継続できるようなシステムを構築する。 ①教務部だけでなく各部、分掌等における、これまでの管理方法等に関する内容を把握する。 ②必要に応じて管理簿やマニュアル等を見直すとともに、適切な運用、管理、保管について整理し、具体的な改善を図る。 (3)ホームページや学校だよりなど、外部への発信をより分かりやすく充実できるよう、内容や方法について改善し実践する。 ①教育活動について臨場感のある発信を活性化するため、行事だけでなく普段の教育活動を積極的に発信する。

	②ホームページで発信する内容について、その対象と内容を整理し、より伝わりやすく、閲覧者が情報を取得しやすいようなページ構成に変更する。 ③保護者にとって学校の取組が身近に感じられるように、ホームページ、学校だより、すぐメール等学校の情報を発信する媒体の関連性を高める。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1)それぞれの教育課程に応じた個別の指導計画について、記載内容や評価・改善に関する理念について理解促進を図るとともに、学校全体でその質を向上させることができるような運用方法を確立させることができたか。 (2)各種重要書類等について、管理方法や運用に関するマニュアルを見直すとともに、適切な管理が継続できるようなシステムを構築することができたか。 (3)ホームページや学校だよりなど、外部への発信をより分かりやすく充実できるよう、内容や方法について改善し実践することができたか。
取組状況・実践内容等	(1)・部によって少しずつ異なっていた個別の指導計画の様式を修正し、自動転記等についても統一した。 ・前期の目標や手だて等について保護者と確認するために、７月に個別懇談を追加した。 ・夏季及び冬季休業中には個別の指導計画に関する評価・改善を行う検討期間を設けた。検討会に向け、個別の指導計画における評価や改善の考え方、記入上の留意点、これまでの記入例（好事例）等をまとめた資料を作成し配付した。 (2)・各部や分掌等で保管している文書について、ファイル名や保存期間、保存場所、重要度等について調査し、一覧表を作成した。 ・保護者から預かった個人情報の一部について、管理簿及び持ち出し簿を一新し管理方法を見直した。 ・より正確な管理ができるよう、保存文書の重要度や使用目的等に応じて保管場所を変更した。 (3)・ホームページ上の「最近のトピックス」では、各部、各分掌と連携し、当校の近況に関する情報を発信した。 ・当校のホームページをより見やすくリニューアルするために、教務部内で調査チームを編成し他校のホームページについて調査を行った。

評価の視点	評　価
(1) 個別の指導計画について、記載内容や評価・改善の理念に関する理解促進を図るとともに、学校全体でその質を向上させることができるような運用方法を確立させることができたか。	A Ⓑ C D
(2) 各種重要書類等について、管理方法や運用に関するマニュアルを見直すとともに、適切な管理が継続できるようなシステムを構築することができたか。	A Ⓑ C D
(3) ホームページや学校だよりなど、外部への発信をより分かりやすく充実できるよう、内容や方法について改善し実践することができたか。	A Ⓑ C D

成果・課題	総　合　評　価
(1)○７月に個別懇談を実施することで、半年ごとのＰＤＣＡサイクルがより実用的に機能するようになった。 ○個別の指導計画における評価と改善について、評価や改善の捉えを Q&A 形式や好事例を提示することで、より具体的な評価及び改善案が多くみられた。 ▲個別の指導計画について、その理念や各様式の記載に関する説明を示したマニュアルを目標とした年度途中に完成させることができなかった。 (2)○校内の保存文書について、一覧表を作成したことで、用途や重要度に応じた保管及び管理方法について整理することができた。 ▲保管や廃棄等のマニュアルまでには至らなかった。 (3)○コロナ禍でも学校の様子を身近に感じていただけるよう「最近のトピックス」では、教育活動の様子を中心に、ほぼ毎週発信することができた。 ▲ホームページのリニューアルについては、目標とした年度途中に完成させることができなかった。	A Ⓑ C D

来年度に向けての改善方策案	・次年度はじめには、周知、活用ができるように、個別の指導計画のマニュアルを年度末までには完成させる。 ・今後も引き続き保存文書に関する保管、管理の在り方を検討し、マニュアルの完成を目指す。 ・「見やすさ」「身近さ」をテーマにしたホームページにリニューアルできるよう、作業を年度内に試作版を作り、来年度には本格運用を目指す。

分掌	渉外部
現状及びアンケートの結果分析等	・安全・安心を第一に今できる活動をＰＴＡ役員と検討し、そのＰＴＡ活動に対し保護者ができるだけ積極的に取り組めるよう支援を工夫している。 ・広報・環境委員会では、「しゃべりっちながら」「すまいるながら」の発行に向けての活動、保護者アンケートの集計、ベルマーク収集等を家庭で行えるよう支援した。特にベルマーク収集については、例年より家庭でできることを増やすため、ベルマークを集める期間を決め、集まったベルマークを家庭で仕分けたり点数計算したりすることができるよう支援した。 ・「ふれあいの日」や「地域交流講座」等の地域交流活動の代替活動としての壁新聞の作成が積極的に行えるよう支援した。長良５校に掲示してもらうことによって当校のＰＴＡ活動の様子や児童生徒のこと、病弱特別支援学校について知ってもらうことができた。 ・ＰＴフォーラムの代替活動として、防災環境部と連携して「しゃべりっちながら」を活用しての家庭での防災意識を高める活動に取り組んだ。保護者が「我が家における防災」について原稿を執筆し協力することで、会員同士の交流を深めることができた。
今年度の具体的かつ 明確な重点目標	(1)研修委員と広報・環境委員が自主的・積極的にＰＴＡ活動に取り組めるよう支援する。 (2)「地域交流講座」等の地域交流活動が、地域、保護者間及び長良５校との交流の場となるよう計画・実施する。 (3)「ふれあいの日」について、保護者と児童生徒が活動を充実させることができ、ＰＴＡ会員同士が交流できるよう計画・実施する。
重点目標を達成する ための校内組織体制	・渉外部とＰＴＡ役員が連携し、学校職員と保護者の協力体制を確立する。 ・地域（長良５校ＰＴＡ等）と連携し、協力体制を構築する。 ・他分掌と連携し、ＰＴＡ関係行事を実施できるよう協力体制を整える。
目標の達成に必要な具体的取組	(1)研修委員と広報・環境委員が自主的・積極的にＰＴＡ活動に取り組めるよう支援する。 ①それぞれの専門委員会の活動について安全・安心に行えるようＰＴＡ役員と内容や時期を検討していく。 ②ＰＴＡ行事一つ一つについての理解を深めるため、「しゃべりっちながら」や「ＰＴＡだより」に目的や内容、参加した保護者の感想等を載せていく。 ③ＰＴＡ行事や研修会等の内容や、保護者が参加する意義について学校職員が理解し、保護者に参加を促すことができるような校内体制を作っていく。 ④保護者が積極的に取り組めるよう、活動ごとに必要であれば保護者にアンケートをとり、それを踏まえて、ＰＴＡ役員会で検討していく。 (2)「地域交流講座」等の地域交流活動が、地域、保護者間及び長良５校との交流の場となるよう計画・実施する。 ①「地域交流講座」等の地域交流活動が、長良５校のＰＴＡとの交流の場として、より積極的に取り組めるよう内容を検討していく。 (3)「ふれあいの日」について、保護者と児童生徒が活動を充実させることができ、ＰＴＡ会員同士が交流できるよう計画・実施する。 ①保護者が動画撮影や作品作り等児童生徒と一緒に家庭でできることは何かを検討し、そのことをＰＴＡ会員同士が交流できるようにＰＴＡ役員と検討し、支援していく。 ②ＰＴＡ行事でもあり、学校行事でもある「ふれあいの日」が全校体制で臨めるよう、計画・実施していく。

達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1)保護者にＰＴＡ活動への参加を促し、保護者同士が繋がることができるＰＴＡ活動が行えるよう支援していくことができたか。 (2)当校の現状とＰＴＡ活動について、理解・啓発を促す方策をとり、当校ＰＴＡ会員と長良５校ＰＴＡとの交流を支援することができたか。 (3)「ふれあいの日」の計画・実施において、保護者の思いを十分に汲み取り、全校体制で実現できるよう支援できたか。
取組状況・実践内容等	(1)・昨年度に引き続き新型コロナウイルス対応のため、ＰＴＡ専門委員会において一昨年度までのような活動を行うことは、難しかった。しかし、ＰＴＡ役員を中心にしてコロナ禍でもできる活動を考え、積極的に取り組めるように支援した。 ・研修委員会の活動では、「地域交流講座（先輩の話を聞く会）」をキャリア支援部との共同主催で行い、８人の保護者がオンラインで参加した。長良５校保護者は参加が難しかったが、後日、講演内容を長良５校に配付した。「ＰＴフォーラム」は、運営委員会職員と連携しながら実施した。研修委員代表が自主的に計画、運営等にかかわり、９人の保護者がオンラインと対面で参加した。 ・広報・環境委員会の活動では、「しゃべりっちながら」「すまいるながら」の発行に向けての取組、「保護者アンケート」の内容の検討、集計分析、「ベルマーク活動」に参加した。 (2)研修委員会を中心に壁新聞を作成した。長良５校に掲示してもらい、当校のＰＴＡ活動や病弱特別支援学校について知ってもらえるよう見やすい壁新聞作りに取り組んだ。 (3)「ふれあいの日週間」として、金華祭と同時開催とし、コロナ禍だからこそ、つながりを大切にしたいという保護者の思いから児童生徒の顔写真のスライドショーやフラッグ作り、作品作り等を行った。一部の保護者は写真や動画を家庭で撮影、提供した。スライドショーは、オンライン配信を行い、多くの保護者に見てもらうことができた。

評価の視点	評　価
(1)研修委員と広報・環境委員が自主的・積極的にＰＴＡ活動に取り組めるよう支援していくことができたか。	A Ⓑ C D
(2)「地域交流講座」等の地域交流活動が、地域、保護者間及び長良５校との交流の場となるよう計画・実施することができたか。	A Ⓑ C D
(3)「ふれあいの日週間」について、保護者と児童生徒が活動を充実させることができ、ＰＴＡ会員同士が交流できるよう計画・実施することができたか。	A Ⓑ C D

成果・課題	総　合　評　価
(1)○地域交流活動の代替活動とした「壁新聞」作りでは、保護者の執筆希望が多く、レイアウトや作成については、研修委員代表が自主的に家で行い、協力して取り組む体制ができていた。 ○「ＰＴフォーラム」では、保護者の疑問や悩み等を保護者同士や教員と話すことができ、有意義な会になった。研修委員代表が司会と感想発表を行い、意欲的に取り組んだ。また、今後も運営委員会職員に協力してもらうことで、保護者のニーズに合うよりよい会にしていく。 ○「しゃべりっちながら」では、新型コロナウイルス対応のため、学校に参集しての活動ができなかったが、登下校時等に役員と話をしながら原稿依頼から発行までスムーズに行うことができた。「しゃべりっちながら」の継続発行希望が多いので、記載内容等をＰＴＡ役員中心に検討できるようにしていきたい。 ▲「すまいるながら」では、新型コロナウイルス対応で保護者からそれぞれの執筆者に原稿依頼をすることができなかった。 ○ベルマーク活動では、ウェブベルマークの活用が好調だった。 ▲ベルマーク活動のうち、自宅での仕分け作業では、多くの保護者の希望があったが、日程、方法の検討不足があり、郵送する件数も多く、自宅で行う活動としては負担のあるケースがあった。保護者がより主体となる方法を今後検討したい。 (2)○「地域交流講座（先輩の話を聞く会）」では、オンラインだからこそ参加ができた保護者がいて、貴重な話を聞くことができたとの感想があった。 ▲年１回発行の「壁新聞」であったが、発行時期が遅れたので、無理のない活動計画を立てる必要がある。今後、長良５校の関係者に壁新聞についてのアンケートを実施予定である。長良５校の代表と共通理解を図りながら、丁寧に進めていきたい。	A Ⓑ C D

(3)〇コロナ禍でのふれあいの日週間をＰＴＡ企画であると同時に学校行事でもあるという考えのもと、保護者の思いを汲み取り全職員に協力してもらい実施することができた。	
来年度に向けた課題と改善方策案	・来年度９月実施予定のふれあいの日について、今年度より早い段階でＰＴＡ役員と学校職員で検討する。 ・保護者の学校参集が難しい場合、何らかの形でＰＴＡ活動に参加できること、無理なく家庭でできること等をＰＴＡ役員会で時間をとり考えたり、他校の活動を参考に情報収集したり、アンケートを実施し方法を探ったりし、ともに考え、充実感のある取組をめざしたい。

分掌	研究研修部
現状及びアンケートの結果分析等	・主題研究の取組を実践交流中心にして各グループ単位で進め、単元計画や授業改善チェックシートを元に話し合いができた。 ・教科部会を開催し、教科の専門性の向上や授業実践の交流など行って教科指導力の向上に取り組めた。 ・専門家による授業支援について、より効果的な活用ができるように周知の方法や日程の決定方法について検討し改善を行った。 ・オンラインの研修や会議がスムーズに行えるように、Ｗｅｂ会議室の調整や、オンライン会議等で使用する教室の調整を行って、混乱が起きないようにできた。 ・タブレット端末やノートＰＣなどの技術的サポートを個別に行って、個々の課題に対応した。 ・ＩＣＴ機器の整備や、効果的な使用法についての研修を実施して、授業での活用を促すことができた。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1)研究のまとめに向けて、各研究グループ内で授業の実践交流がより深まるようにする。 (2)より効果的で効率的な研修が行えるように全体計画を作成する。 (3)タブレット端末やノートＰＣの授業での活用を促進する。
重点目標を達成するための校内組織体制	・研究チーフ会において、各研究グループに連絡係を置くために全校体制で人選の選択を行う。 ・教員の指導力を高めるための研修を推進するために、各分掌やコア・ティーチャーとより綿密に連携を図る。 ・ＩＣＴ機器のより実践的な活用を目指すために、教員の全校児童生徒一人一人に対するアプローチを個別に支援する体制を整備する。 ・情報セキュリティポリシーを遵守のため、情報セキュリティ委員会等を通じて、学校全体の共通理解を図る流れをつくる。
目標の達成に必要な具体的取組	(1)研究のまとめに向けて、各研究グループ内で授業の実践交流がより深まるようにする。 ①各部・類型グループで昨年度に作成した単元計画の検証を進める。 ②各グループでの実践を、次年度からの取組に繋げられるようにまとめる。 (2)より効果的で効率的な研修が行えるように全体計画を作成する。 ①研修の全体計画を作成して各研修の位置づけを明確にし、内容の偏りや重複がないかについて確認する。 ②専門家による授業支援の体勢を整備して、個々の教員のニーズに合った授業支援になるようにする。 ③研修の事後アンケートを分析し、成果と課題をフィードバックする。 (3)タブレット端末やノートＰＣの授業での活用を促進する。 ①児童生徒の各障がいの特性、発達段階の捉え方を踏まえたＩＣＴ機器の活用のための相談を行い、より効果的なＩＣＴ機器活用方法をアドバイスする。 ②予備機や代替案等を確保して、機器トラブルによる使用不能の状態が起きないようにする。 ③機器の調達、修理に迅速に対応できるように、報告の流れを見直し、情報を共有して対応をスムーズにする。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1)主題研究において、各研究グループ内での授業実践交流を行って、結果を次年度からの取組に生かせるようにまとめることができたか。 (2)各研修の目的や対象を明確にした職員研修の全体計画を作り、効率のよい研修計画を作成することできたか。 (3)授業でＩＣＴ機器の稼働率を向上させ、活用を促進できたか。

取組状況・実践内容等	(1)・研究主題を『社会とかかわる力を育てる病弱教育の在り方～新学習指導要領を踏まえた授業づくりを通して～』とし、各グループで評価表や振り返りシートを使って実践交流をして、研究主題にせまるための実践を進めた。 (2)・各研修会について参加者アンケートを分析し、研修内容や対象者の妥当性について分析し、主催する分掌長にフィードバックした。 ・各分掌の主催する研修を集約し、目的や対象者について精選を行い、次年度の研修計画を作成した。 (3)・相談窓口を広げ、各学部のＩＣＴ機器やオンラインに関する相談を受けた。またＩＣＴ研修会を通して有用なアプリや新しい情報、既存の機器の使い方等を職員に紹介した。 ・機器の修理や調達を迅速に行い、またそれらの使用方法やルールを提示することで、機器を広く、安心して使えるようにした。

評価の視点	評価
(1)研究主題・学校の課題に迫って、校内研究を進めることができたか。	A Ⓑ C D
(2)各研修の目的や対象を明確にした職員研修の全体計画を立てることができたか。	A Ⓑ C D
(3)各学級のニーズに応えながら、安心・安全な活用を目指し、授業でのＩＣＴ機器の更なる活用がみられたか。	A Ⓑ C D

成果・課題	総合評価
(1)○研究チーフ会にて、各研究グループの取組報告、今後の見通しや方向性を確認して進めることができた。 ○各研究グループの実態に応じた方法で研究グループ会を実践交流の場としたことで、単元・活動計画を基にして研究主題にせまった他部の授業内容や支援方法について意見交流することができた。 ▲他グループと実践交流する時間をもつことが難しかった。 (2)○各研修のアンケート結果の分析を行い、主催の分掌にフィードバックすることができた。 ○各分掌の研修を集約し、学校全体の研修のグランドデザインを検討することができた。 ▲病弱特別支援学校としてふさわしい研修の内容を検討し、職員に周知していく必要がある。 (3)○各部や学級のニーズを受け、児童生徒の実態に沿ったＩＣＴ機器の活用方法をアドバイスすることができた。またＩＣＴ研修会にて、様々なツールと使い方、有用なアプリやタブレット端末の機能を紹介し、ＩＣＴの活用をより促すことができた。 ○オンラインでは、行う授業や行事、講義に合わせた機器を提供し、円滑に進めることができた。またトラブル時を想定し、事前のリハーサルを行ったり、代替機の準備をしたりした。 ○iPad に関しては、毎日ほぼ１００％の稼働率で活用することができた。その他ＰＣや Surface、周辺機器や外部スイッチ等も毎日使用されていて、各職員が工夫してＩＣＴ機器を活用していた。 ▲ＩＣＴ機器や周辺機器の在り処を明確にして、使用しやすい環境を整える必要がある。	A Ⓑ C D

来年度に向けての改善方策案	・校内研修をより意義のあるものとするために、グループに所属するコア・ティーチャーと連携し研究グループ会を進める。 ・全校での実践交流の方法を工夫することで、他グループの実践も互いに共有できるようにする。 ・各分掌と緊密に連携し、病弱特別支援学校として必要な知識技能を効率よく身に付けるための研修の在り方を引き続き検討していく。 ・機器の整理をして、使用しやすい環境を整える。 ・使い方の紹介や活用事例の紹介を積極的に行って、ＩＣＴ機器の活用を促進する。

令和３年度　自己評価・学校関係者評価　報告書

岐阜県立長良特別支援学校

学校番号	１０３

分掌	保健部
現状及びアンケートの結果分析等	・感染予防対応について外部の専門家と連携して検討し、分掌間及び各部の連携や全職員が互いに協力することで、全校体制で必要な対応をとることができている。 ・健康記録表の記入提出を依頼し、児童生徒及び保護者、職員、来校者の健康チェックを徹底した。各部の協力を得て、きめ細かい健康観察をすることができている。 ・感染症対策物品を事務部や他分掌と連携して調達し、管理した。市場に応じた必要量の調達と大量の物品を安全に保管する場所の確保及び環境作りが課題である。 ・看護師と教職員が連絡を密にし、連携して日々安全で適正な医ケアの実施に努めている。また、病状の変化する医療的ケア児のケアについて、指導医・主治医の指導を受け、保護者の合意を得て、安全な医ケアに努めている。 ・登校開始時に医療的ケア児が教室に入れない状況は、看護師の申し送り時間を調整することで改善していく。 ・令和３年度から実施予定の医療的ケア児校外学習充実事業は延期となった。 ・基本の緊急時対応マニュアルを作成し、実態に対応した個々のマニュアルを作成して、緊急時の体制を整えたが、長良医療センターへの搬送における課題が残った。 ・ヒヤリハット報告内容を PC 掲示板に掲載したが、報告内容の周知と報告の必要性への意識の向上を図ることが難しかったため、紙面での回覧や朝礼での呼び掛け等を行う。 ・感染予防に対応した給食配膳や二次調理を行うための対策を検討し、関係職員の協力を得て、実施することができている。食形態情報の周知とアレルギー対応に準じた食品の取り扱いについて、職員間の連携に課題が残った。二次調理室から必要時に直ぐ連絡が取れるように校内電話を設置する準備をしている。 ・摂食・口腔ケアのアンケートを行い、１・２月に２事例の個別の情報交換会を実施した。定期的な実施や専門的な知識をもつ職員と課題を検討できる体制作りを進めたい。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1)全校体制での感染予防対応を推進し、感染予防教育を充実する。 (2)安全で適正な医療的ケアを推進する。 (3)安全な給食実施を推進し、食育を充実する。
重点目標を達成するための校内組織体制	・感染状況に応じた対応を全校体制で実施するために、指導医や薬剤師等専門家との連携、感染症対応委員会等の適宜開催、他分掌や部との有機的な連携を進める。 ・安全で適正な医療的ケアを実施するために、医療的ケア検討委員会等の適宜開催、指導医や主治医、医療機関や保護者、部との連携を進める。 ・安全な配膳や二次調理及び摂食指導を実施するために、配膳員・二次調理担当者・部との円滑な連携及び研究研修部やコアティーチャーとの連携を図る。
目標の達成に必要な具体的取組	(1)全校体制での感染予防対応を推進し、感染予防教育を充実する。 ①感染状況や対策について情報を得て、外部専門家の指導・他分掌や部との連携・感染症対応委員会等の開催により感染状況に応じた対応を検討し、全職員への周知徹底を図る。 ②部や他分掌と連携して、児童生徒と職員及び来校者等の健康観察を徹底する。 ③防災環境部や事務部と連携して、対応物品の必要量を調達し、適切に管理する。 ④感染予防に必要な情報や授業に生かせる情報を発信する。 (2)安全で適正な医療的ケアを推進する。 ①日々の体調や病状等の情報を得て、安全なケア内容について看護師や関係職員間で共通理解して実施できるように、部や保護者・医療機関との連携及び看護師間の連携を進める。 ②行事や授業におけるケアを安全に実施できるように、企画段階から看護師が加わり、ケア実施の場所やタイミング、物品の確認や活動の調整等を行う。 ③病状の変化する医療的ケア児についての安全なケアの内容について、指導医・主事医から指導助言を受けて医療的ケア検討委員会等で検討し、必要に応じて保護者との合意を図ったり、看護師や関係職員間で共通理解したりする。 ④長良医療センターへの搬送時の課題について検討し、緊急時対応マニュアルを改定して職

	員に周知し、訓練を実施して、迅速な対応ができる体制を整える。 ⑤医療的ケア児校外学習充実事業を安全に実施するために必要な内容を整理する。 (3)安全な給食実施を推進し、食育を充実する。 ①配膳や二次調理に関わる職員と連携し、衛生管理と器具の安全管理を徹底する。 ②各部の二次調理担当の中でチーフを依頼し、部内で連携して、食形態・調理手順・アレルギー対応等の情報共有を図る。 ③栄養教諭と担任や教科担当者が連携して食育を実施し、食育年間計画作成に生かす。 ④摂食・口腔ケア指導に関する情報交換会を実施し、研究研修部やコアティーチャーと連携して、安全な給食実施に向けて指導に必要な情報を提供し、検討する場を設ける。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1)感染状況に応じた対応を立案し、全校体制で感染予防対応を実施することができたか。 (2)指導医や主治医と連携し、部と協力して、安全で適正な医療的ケアを実施することができたか。 (3)配膳や二次調理に関わる職員や部と連携して、安全な給食実施を推進することができたか。
取組状況・実践内容等	(1)・新型コロナウイルス感染症の感染対策の情報を得たり、外部専門家の指導を受けたりして、感染に応じた感染症対策を立案した。感染症対策物品を事務部と連携して調達し、一カ所にまとめて在庫管理した。 ・防災環境部と連携してCO_2チェッカーを各教室に職員室に導入し、換気チェックシートを教室や、各特別教室に配付した。 ・手洗いの歌、動画、キャラクター、ポスターを作成し、手洗いの歌キャンペーンを実施した。 (2)・病状や体調が変化する児童生徒の安全な医ケアの内容について、指導医・主治医からの指導助言を受けて検討し、保護者との合意を図り、看護師や関係職員間で共通理解して慎重に進めた。 ・長良医療センターのコール体制搬送訓練は、新型コロナウイルス感染症拡大のため実施できなかった。 ・医ケア児校外学習充実事業は新型コロナウイルス感染症のため他校の校外学習実績情報を十分に得ることができず、令和５年度以降の当校実施は未定、内容の整理には至らなかった。 (3)・感染症対策をはじめ、安全に配膳・二次調理を行うための対策を継続して実施した。各部に二次調理担当チーフを置き、担当職員との連絡調整役とした。 ・食育年間計画に沿って朝食アンケートや食育強化月間を実施し、食指導した。 ・摂食・口腔ケア実態表を作成し、担当者間で実態や課題を把握し検討した。 ・異物混入対応について、マニュアルに沿った対応ができていないことがあった。

評価の視点	評価
(1)新型コロナウイルス感染状況に応じた感染症対策を推進し、感染予防教育を充実することができたか。	A (B) C D
(2)保護者や医療機関、部と連携し、行事や日々の教育的活動における医療的ケアを安全に実施することができたか。	A (B) C D
(3)関係職員と連携し、安全な給食実施を推進し、食育を充実することができたか。	A (B) C D

成果・課題	総合評価
(1)○各部や分掌と連携して感染症状況に応じた、より具体的な対応を全職員に周知徹底することができた。物品管理を一カ所にしたことで、在庫の出し入れや残数把握がしやすく、適切な在庫管理をすることができた。 ○CO_2チェッカーの導入や換気チェックシートの活用により、CO_2測定値によって換気を実施するなど、換気に対する意識をより高めることができた。 ▲感染予防教育では、小学部の児童には、手洗いの歌は効果的な指導であったが、中高生に対しては発達年齢に合っていないところもあった。 (2)○児童生徒の病状が変化した場合や課題が生じた際は、児童生徒の医ケアについて医療的ケア検討委員会（臨時）等を開催して指導医、看護師と関係職員で検討し、安全に医療的ケアを実施することができた。	A (B) C D

▲新型コロナウイルス感染拡大により、長良医療センターとの緊急コール体制の放送訓練はできたが、搬送を含めたシミュレーション訓練はできなかった。病院担当者全員と当校担当者の打ち合わせを実施し、体制やマニュアルの確認をして課題を出し合う予定である。 ▲医ケア児校外学習充実事業の他校の実績をふまえ、内容を整理する必要がある。 (3)〇二次調理担当チーフを軸に、担任と二次調理担当職員との食形態や、アレルギー対応等の連絡調整等で連携し、円滑な業務を遂行することができた。 〇食育では、朝食アンケート、食育動画、食育プリント、食育掲示、メニュー紹介放送等の取組を通して、給食や食についての関心を高めることができた。 〇摂食に関するケース会議や主治医面談を実施し、関係者を集めて情報共有しながら検討を重ね、保護者と連携しながら慎重に進めることができた。 ▲異物混入対応では、マニュアルに沿った対応の共通理解を図り、安全に実施するための方策を検討する。	
来年度に向けての改善方策案	・感染予防教育では、中・高等部の生徒に対する感染予防の知識理解を深めるための指導の実施等、生活年齢に応じた指導内容を検討する。 ・長良医療センターのコール体制搬送時の課題に対する改善策を検討し、マニュアルを追加・訂正してコール体制を取り入れた緊急時対応訓練を実施する。 ・医療的ケア児校外学習充実事業の実施に向け、他校の実績をふまえつつ、指導医・主治医 の助言を仰ぎ、十分に検討して、準備をすすめていく。 ・給食配膳、二次調理における異物混入時等対応マニュアルや、手順表について関係者へ周知徹底する。

分掌	生活支援部
現状及びアンケートの結果分析等	・自己紹介やがんばったこと、出来事等を動画やスライドで発表し、各学級で見合うことでお互いを知る活動に取り組んだ。また、ドリームアート展、各種作品展等に参加し、児童生徒の創作活動や表現活動を校内外に発信した。 ・あったかハート活動、人権啓発放送や人権だより発行等を行った。また、人権意識の向上やいじめ問題等の未然防止・早期発見を図るため、教員のチェックシートによる啓発を行った。 ・スクールカウンセラーによる研修や教育相談だよりの発行を行い、教育相談に関する職員の意識の向上を図った。また、教育相談月間においてアンケートの実施及び児童生徒のヒアリングを行い様々な変化に早期に気付くことができるよう努めた。また、児童生徒や保護者、教員のスクールカウンセラーによる相談会を実施した。 ・登下校時の安全指導を行った。また、非常変災時における帰宅確認訓練及び、警報等気象状況に応じた対応を行った。 ・交通安全や捜索、不審者対応に関して、警察からの資料を基にマニュアルを教員間で確認したり、作成されたプレゼンを周知したりした。また、情報モラルについて岐阜北警察署担当者から講話及びアドバイスを受けた。 ・アンケートより、いじめの取組について保護者から「わからない」と評価を受けた。いじめに関する当校の考え方や取組等基本方針を保護者に伝わりやすくする必要がある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1) 児童生徒の実態に応じた、自己肯定感をはぐくむことができる支援を実施する。 (2) 児童生徒・保護者一人一人を尊重し、受容的に接するための支援を実施する。 (3) 児童生徒が学校生活を安心・安全に送ることができるための支援を実施する。
重点目標を達成するための校内における組織体制	・児童生徒が学校や地域の一員として、活動する意義や喜びを感じるとともに、学級や部を越えて交流できる取組を行う。 ・児童生徒理解に努めるとともに、児童生徒の現状や対応について共通理解及び必要とされる支援について連携がとれる体制作りを行う。 ・全職員が児童生徒や保護者一人一人を尊重して受容的に接すること、信頼関係を築くことを図るための取組や研修を行う。 ・いじめ問題、情報モラル、防犯、交通安全等に対する危機管理意識を高め、迅速に組織で対応できる安心・安全な学校となるよう研修や周知を行う。外部機関との情報交換を行いなが

	ら、より当校の実情、児童生徒の実態に適した体制を確認する。 ・気象の変化や災害、交通状況等緊急時における対応や引き渡し、ヒヤリハットアクシデント事案について防災環境部、保健部と連携する。
目標の達成に必要な具体的な取組	(1) 児童生徒の実態に応じた、自己肯定感をはぐくむことができる支援を実施する。 ①学級や部を越えた児童生徒の交流やお互いを認め合える活動を積極的に行う。 ②充実した創作活動・表現活動を計画的に行うことができるよう、創作活動担当者との打ち合わせを行う。 (2) 児童生徒・保護者一人一人を尊重し、受容的に接するための支援を実施する。 ①職員が人権感覚を磨き、受容的な教育相談や寄り添う支援を行うことができるよう、定期的な確認や職員研修、スクールカウンセラーの活用を計画する。 ②日常的・定期的な教育相談を継続して行う。また、状況に応じて校内及び外部機関と連携した支援体制を作る。 ③職員の危機管理意識を高め、問題の早期発見と組織として迅速な支援ができるよう、児童生徒に関する情報交換を行う。 ④各種たよりの他、いじめ防止対策基本方針を配付したり、ホームページに載せたりすることで、いじめやコロナ禍における差別等、人権教育に関する分掌の取組を児童生徒や保護者に分かりやすく発信・周知する。 (3) 児童生徒が学校生活を安心・安全に送ることができるための支援を実施する。 ①登下校時のあいさつ及び安全指導、スクールバスの安全運行のための連携・連絡を計画的に行う。 ②捜索や防犯、交通安全、情報モラルに関する支援、防災環境部と協力した安全指導（非常変災時の対応及び引き渡し訓練）を計画する。 ③児童生徒の心身の安全面を把握するとともに状況に応じて各部、他分掌、コア・ティーチャー、外部機関と連携した支援体制を作る。（ケース会議）
達成度の判断・判定あるいは指標	・児童生徒が自己肯定感をはぐくむことができる支援ができたか。 ・情報共有や研修を行い、一人一人を尊重した受容的な支援ができたか。 ・安心・安全に学校生活を送ることができる支援ができたか。
取組状況・実践内容等	(1)・学習活動を動画や作品として発表したり、交流したりする活動として金華祭週間や全校集会を行った。児童生徒会活動では、年間テーマ決めや金華祭週間の司会を行うとともに、昼の放送を行い、明るい学校づくりに向けて取り組んだ。 ・ドリームアート展や各種作品展に出展し、創作活動を校内外に発信した。 (2)・人権教育では、あったかハートツリー活動、人権放送、人権だよりの発行を行った。また、人権意識の向上やいじめ問題等の未然防止・早期発見を図るため、研修会や教員のチェックシートによる啓発を行った。 ・教育相談では、教育相談たよりの発行、スクールカウンセラーによる研修会や相談活動を行った。また、教育相談月間において、生活アンケートの実施及びヒアリングを行い、現状や変化に気付くことができるように努めた。 (3)・毎日登下校時に校門に立ち、通学時における安全確認を行った。また、各分掌と連携し、安全な登下校及び、非常変災時における帰宅確認訓練及び、警報や気象状況に応じた対応を行った。 ・交通安全や捜索、不審者対応に関し、マニュアルの確認や、資料を作成して周知を行った。また、情報モラル指導の研修会を行った。

評価の視点	評価
(1)児童生徒が自己肯定感をはぐくむことができる支援ができたか。	A (B) C D
(2)情報共有や研修を行い、一人一人を尊重した受容的な支援ができたか。	(A) B C D
(3)安心・安全に学校生活を送ることができる支援ができたか。	A (B) C D

成果・課題	総合評価
(1)○金華祭週間では、オンラインの利点を生かして、個性や持てる力を創作や表現活動として発信することができた。また、ドリームアート展や作品展への参加を通して地域への発信をすることができた。それぞれの活動の中で、がんばりを認め合うことで達成感や満足感を得た	A (B) C D

り、自己肯定感を育んだりすることができた。 ▲児童生徒会活動において、役員として活動する児童生徒が少なくなっている。 ▲行事に対する参観や外部への情報発信、公開の在り方について課題が残った。 (2)〇あったかハート活動では、児童生徒、保護者、職員が感謝の気持ちを込めたメッセージを伝え合い、人権感覚を啓発する取組となった。また、新型コロナ感染症に関して、児童生徒の実態に合わせた授業や職員研修を行い、感染に関する正しい知識や対応を理解したり、思いやりについて考えたりすることができた。 〇研修会を通して、職員の教育相談に関する意識を高めることができた。また、教育相談月間により、担任からの意見も確認しながら、児童生徒の心の状態や変化に早期に気付き、情報共有するよい機会となった。 〇スクールカウンセラー相談においては、相談しやすいとの意見が多く、生徒や保護者に対し、継続的な相談活動が行われた。また、担任が助言を受けたり、支援会議に参加していただいたりすることで、効果的に活用することができた。 (3)〇登下校や校内における生活安全に関して、年間を通して事故や生徒間トラブルはなく、児童生徒が安全で、安心して学校生活を送ることができた。 ▲交通安全等、生活安全教育については、個別に指導を行った。担任や関係機関との連携を大切にしながら、実態や必要性に合わせて取り組む必要がある。	
来年度に向けての改善方策案	・金華祭やドリームアート展について、開催の在り方を検討する。 ・次年度はスクールバス運行の当番校となる。関係機関や各分掌との連携を密にし、日々の登下校や非常変災時における対応等、安全な通学支援に努める。 ・関係機関をはじめ、資料やデジタルコンテンツを活用し、交通安全や不審者対応、情報モラル等生活安全に係る支援を学校の実態に応じ、定期的、継続的に行う。 ・生徒指導上の課題や危機管理について、実態把握、情報共有、支援の在り方、各教員の役割等共通理解を図り、早期に組織として対応できる体制を示す。 ・外部機関と情報交換を行いながら、人権や教育相談、情報モラル、いじめ、ＳＯＳの発信等、生徒指導における実情が周知できるように研修を実施する。また、職員に対してアンケートや聞き取りを行い、研修のテーマや聞きたいこと、困っていること等を集約し、学校課題として研修に臨むことができるようにする。

分掌	防災環境部
現状及びアンケートの結果分析等	・県の方針、市の指導に基づき防災マニュアル、避難確保計画を改訂し周知した。 ・感染症対策から、人数を限定した防災対策本部訓練を実施した。本部長を軸とした本部職員の動きを確認できたが、全職員への任務周知は課題が残る。 ・新たに設置した携帯用電源等に管理責任者を指定するなど、備蓄品の管理体制を整えた。 ・感染症対策から命を守る訓練を学級毎に実施し、希望した一部の学級のみ長良医療センター通路を一時集合場所とする訓練を実施したが、一斉避難した場合に起こりうる課題の把握に課題が残った。 ・引き渡し訓練、安否確認訓練を実施し、迅速な対応ができるよう課題を検討した。 ・地震、火災、土砂災害を想定したミニ命を守る訓練を実施した（年６回）。 ・「しゃべりっちながら」や学校だよりを活用して保護者に防災に関する情報を発信した。教育活動に関するアンケート内「緊急時の対応にしっかり備えている」の項目に対する結果は昨年と比較し数値が上昇したため、保護者への啓発がある程度進んだと考える。 ・環境教育月間を設定し、期間中に正しい清掃方法について学ぶ機会をもった。 ・担当者と事務部が連携し、特に必要な修理等は至急実施するなど見通しをもった対応ができた。一方で、安全点検から修繕までの流れが不明瞭との意見が出た。 ・安全点検が形式的になっている部分があることを受け、点検方法の見直しを行っている。 ・消耗品、加湿器等物品の購入と管理、全校体制での消毒作業により感染症対策に取り組んだ。授業毎、放課後毎に実施する消毒作業は職員の負担が大きいとの意見がある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1)非常変災時に対する職員の危機管理意識を高めるために、防災マニュアルを踏まえ、児童生徒と職員が命を守ることを第一に行動できる訓練や研修を実施する。 (2)環境の安全確保に対する職員の危機管理意識を高めるために、怪我や事故を未然に防ぐ意識

	を持ち、確実に安全点検を実施するよう働きかける。 (3)感染症予防のために、環境整備を進める。
重点目標を達成するための校内組織体制	・各職員が非常変災時の自身の任務を理解し非常時に安全・迅速に対応できるよう、防災対策本部及び各分掌と連携しながら訓練・研修を進める。 ・非常変災時の引き渡しの在り方等について、各部及び生活支援部と連携し検討する。 ・家庭での防災対策について、キャリア支援部や渉外部と連携し推進する。 ・環境整備について、事務部とも連携し進める。 ・感染予防のための環境整備について、保健部及び各部と連携し進める。
目標の達成に必要な具体的取組	(1) 非常変災時に対する職員の危機管理意識を高めるために、防災マニュアルを踏まえ、児童生徒と職員が命を守ることを第一に行動できる訓練や研修を実施する。 ①防災マニュアル理解のため、防災マニュアルに基づいた職員ＤＩＧ訓練を、感染症予防として全職員を２グループに分けるなどの対策を講じつつ実施する。 ②様々な状況に対応しつつ安全な避難行動をとることができるよう、自ら考え判断する状況を付与した命を守る訓練を、密を避けて待機するなど避難の際の感染症対策の共通理解を図りながら、全校一斉の訓練として実施する。 ③非常変災時に適切な対応が取れるよう、引き渡し訓練、安否確認訓練を継続する。 ④児童生徒の災害時の安全確保のため、長良医療センターとの連携の在り方を検討するとともに、地域に対して防災に関する情報発信をし、当校の状況への理解を進める。 ⑤今後も、高度な医療的ケアを必要とする当校児童生徒に応じた防災情報を保護者に提供していくことを継続していくために、様々な手段で情報を収集するよう努める。 ⑥児童生徒が安全に屋外避難するための物品の整備を進める。 (2) 環境の安全確保に対する職員の危機管理意識を高めるために、怪我や事故を未然に防ぐ意識をもち、確実に安全点検を実施するよう働きかける。 ①確実な安全点検実施のため、具体的な点検方法を周知する。 ②安全確保が最優先であることを念頭に迅速に異常個所を報告できるよう、修繕までの流れの周知を図る。 (3)感染症を予防のために、環境整備を進める。 ①無理なく長期に渡り消毒作業に取り組むことができるよう、使用薬剤と消毒方法等について、根拠ある情報に基づき適時見直しを行い周知する。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1)感染症対策を講じつつ、実際の災害を想定しながら訓練を実施し、防災に対する意識を高めることができたか。 (2)継続的に安全点検に関する周知を図ることで、職員は各点検個所に応じた方法での安全点検及び迅速な報告を行うことができたか。担当者は事務と連携し迅速な修理等の対応ができたか。 (3)消毒方法を適時見直し、適切な消毒作業を継続することができたか。
取組状況・実践内容等	(1)・夏休みに講師を招き、感染症に配慮しつつ分掌ごとにＤＩＧ訓練研修を実施した。 ・密を避けつつ、各自が状況判断できるよう、通れない箇所を設定した命を守る訓練を実施し、明らかになった課題をフローチャートへ反映した。 ・地震、火災、土砂災害を想定したミニ命を守る訓練（週間）を実施した。 ・生活支援部と連携しながら引き渡し訓練を実施し、密を避ける形での全校一斉引き渡しの課題を検討、方法を見直した。 ・「耳より情報」を月１回のペースで発行し、命を守る訓練と関連付けたり、時季に合わせたりした様々な防災情報を保護者に伝えた。 (2)・大掃除週間と合わせてクリーンアップキャンペーンを実施し、掲示物を作成したり、放送を行ったりして掃除方法について学びながら実施できるよう設定した。 ・安全点検を定期的に実施し、修理や修繕個所を把握し、事務部と連携しながら環境の改善に努めた。 (3)・保健安全部と連携して、CO2 チェッカーの導入や水道蛇口の自動水栓化を行い、感染症対策に取り組んだ。 ・購入できるアルコールの量が増加したことに伴い、午前の消毒作業を界面活性剤からアルコール消毒に変更した。

評価の視点	評価
(1)防災マニュアルを踏まえながら、児童生徒と職員が命を守ることを第一に行動できる訓練や研修を実施することで、非常変災時に対する職員の危機管理意識を高めることができたか。	A Ⓑ C D
(2)定期的な安全点検の実施を通して、環境の安全確保に対する職員の危機管理意識を高めることができたか。	A Ⓑ C D
(3)消毒の実施方法についての改善や、環境整備を図ることで、感染症対策を進めることができたか。	A Ⓑ C D

成果・課題	総合評価
(1)○ＤＩＧ訓練研修を通して、フローチャートをもとに、非常変災発生後の個人の動きや分掌の動きについて確認した。 ○医療的ケアを必要とする児童生徒が多い、当校の実態に応じた防災情報について、継続的に保護者に提供できた。 ○長良医療センターとの申し合わせを行ったことで、非常変災時の避難先のひとつとして医療センター内への避難が可能になった。 ▲引き渡し訓練の際に、感染症に配慮するために部ごとに出入口や引き渡し場所を設定し、１台ずつ安全に移動を行ったが、職員や車の動きをイメージしづらいことが課題となった。 ▲命を守る訓練について、事前事後の反省を各学級で話し合いを行う形式に変更し、職員ひとりひとりが課題意識をもって参加できるように設定したが、課題意識をもつことに課題が残った。 (2)○安全点検用紙を用いて修理・修繕箇所の状況を把握できたこと、事務部と連携して修理を至急実施するなどの対応ができた。 ▲安全点検用紙の配付方法を変更し、確実に点検を行えるように設定したものの、形式的になっている部分がある。 (3)○教室の水道蛇口を自動水栓化したことで、利便性が向上するとともに、水栓から感染する可能性が低くなった。 ○複数の教師業務支援員との連携により、教員の消毒作業が軽減された。	A Ⓑ C D

来年度に向けての改善方策案	
	・今年度の変更点を踏まえつつ、防災マニュアルを周知・活用できるよう、より実践的な訓練を工夫、実施する。また、訓練から得られた課題を検討し、マニュアルに反映する。 ・安全で現実的な避難行動をとることができるよう、自ら考え判断する状況を付与した訓練内容を検討、実施する。 ・非常変災時でも安全かつ早急に引き渡しが行えるよう、日頃の送迎状況にあわせた形での引き渡し訓練を検討・実施する。 ・児童生徒の実態に即した変災時の安全確認方法について情報を得られるよう、可能な範囲で各種防災に関する研修会に参加する。 ・長良医療センターと連携し、変災時の対応について協力していくことや、定期的に保護者に情報発信を行うこと等、理解啓発を進める。 ・安全な環境の整備のため、より確実に点検が実施できるよう安全点検の方法を検討、周知する。 ・無理なく長期に渡り取り組むことができるよう、根拠ある情報に基づいた消毒方法及び、作業分担の見直しを適宜行う。

令和３年度　自己評価・学校関係者評価　報告書

岐阜県立長良特別支援学校

学校番号	１０３

分掌	キャリア支援部
現状及びアンケートの結果分析等	・生徒一人一人の状況に応じて、担任、部主事、他分掌等と連携しキャリア実習や施設見学等を行っており、自己理解を深めたり、進路選択につなげたりしている。 ・保護者向けに「進路のしおり」の配付をしているが、キャリア教育については説明や理解が十分とは言えない状況である。各部段階におけるキャリア教育とは何をするべきなのか、分かりやすい情報提供が必要である。 ・保護者が校内に入ることがなくなり、担任以外の職員との接点も減って、保護者が情報を得にくくなった。各部毎のキャリア通信の発行を増やしたり手にとってもらいやすいように色上質紙に印刷したりしたが、更に情報発信の工夫が必要である。 ・職員に向けて施設見学を実施している。 ・進路指導主事等が可能な限り個別懇談に入り、保護者のニーズを汲み取り、必要な情報を発信している。 ・個別の教育支援計画のＰＤＣＡサイクルの流れは保護者にも浸透し、日々の実践や個別の指導計画と連動した内容になってきているが、個別の教育支援計画の活用の提案について職員への周知徹底が十分とはいえない状況である。 ・各部の児童生徒の支援に関わり各部毎で外部の関係機関と連携して支援会議を開き、情報共有や共通理解を図りながら児童生徒の支援を行っている。但し校内において学校全体で組織的に対応しなければいけないケースもある。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1) 児童生徒の発達の段階に応じたキャリア教育を推進する。 (2) 個別の教育支援計画の効果的な運用を行う。 (3) 職員間で情報を共有しながら、家庭、医療、福祉等の関係機関とも連携して校内・進路支援を行う。
重点目標を達成するための校内組織体制	・担任、部主事、他分掌と連携しキャリア教育の視点からコロナ禍で工夫をしながら行事等の教育活動を推進する。 ・支援が必要な児童生徒に対して、他の分掌等と連携し校内ケース会議を行い校内の支援体制を作る。 ・担任や各部主事と相談しながら進路指導主事や部の校内支援担当者を中心に、外部機関との連携を積極的に図る。
目標の達成に必要な具体的取組	(1) 児童生徒の発達の段階に応じたキャリア教育を推進する。 ①高等部においては、進路を見据えて外部模試を受験したりキャリア実習等を系統的、段階的に行ったりして進路決定につなげる。 ②「進路のしおり」の内容と類型別の活用事例の紹介を職員に行い、懇談時に「進路のしおり」を用いてキャリア教育の視点で話すことで、保護者の理解を促す。 ③「キャリア通信」の回数や内容や紙面構成を工夫する。 (2) 個別の教育支援計画の効果的な運用を行う。 ①校内支援担当者等が必要に応じて個別懇談に入り、保護者と直接話をする機会をもつことで保護者のニーズをくみ取り、必要とされる情報を発信する。 ②個別の教育支援計画の利用例を示し、活用を促していく。 (3) 職員間で情報を共有しながら、家庭、医療、福祉等の関係機関とも連携して校内・進路支援を行う。 ①児童生徒の状況に応じて、担任や部主事、生活支援部、コア・ティーチャー等と連携しケース会議等を開いたりして、次の支援へとつなげる。 ②ハローワークや障がい者就業・生活支援センター、福祉事業所等の機関や相談支援専門員等と連携し、校内・進路支援を行う。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1) 各部におけるキャリア教育の課題に沿った実践ができたか。また保護者への理解啓発を図るための取組ができたか。 (2) 個別の教育支援計画のＰＤＣＡサイクルの流れを作り、効果的な運用ができたか。 (3) 支援会議や移行支援会議を開催することで、個々の課題に応じた支援ができたか

取組状況・実践内容等	(1)・コロナの感染拡大状況を見ながらの校外実習やオンラインを活用して、キャリア実習、職場見学、先輩の話を聞く会、進路指導主事の話など実施してキャリア学習を進めることができた。 ・進路のしおり（全校版）を改正して『小→中→高におけるキャリア教育の取組』について、職員や保護者（懇談時）に説明することで、校内でのキャリア教育の推進に努めた。 ・進路通信の発行を増やして年６回とし、うち２回は各部毎にキャリア教育の視点で教育活動の紹介をした。また、岐阜・中濃地区の新規事業所一覧を載せた。 (2)・新１年生の第１回目の個別懇談に、校内支援担当者が入り、保護者に個別の教育支援計画の目的や内容の説明をした。 ・個別の指導計画と合わせて懇談時に確認し、卒業時には移行支援会議の資料として活用した。 (3)・家庭の状況に変化があった場合も、担任からの情報提供を部主事や他の職員へ共有しながら支援することができた。 ・居住地の障がい福祉課、相談支援専門員、エール岐阜、就労支援事業所、進路先等と連携して、校内支援、進路支援を行った。

評価の視点	評価
(1)各部におけるキャリア教育の課題に沿った実践ができたか。また保護者への理解啓発を図るための取組ができたか。	(A) B C D
(2)個別の教育支援計画のＰＤＣＡサイクルの流れを作り、効果的な運用ができたか。	A (B) C D
(3)支援会議や移行支援会議を開催することで、個々の課題に応じた支援ができたか。	A (B) C D

成果・課題	総合評価
(1)○コロナ禍ではあったが、それぞれの部・グループにおいて工夫を凝らしてキャリア学習を進めることができた。 ○保護者対象の学校教育活動に関するアンケートでは、『懇談やキャリア通信を通し、児童・生徒や保護者に向けて、進路に関する連絡や情報提供を行っている』という項目に『あてはまる』が８９％と、例年よりも高評価を得た。 ▲with コロナでの行事や取組、情報発信の方法を引き続き工夫する。 ▲学校全体の３５％にあたる訪問生（在宅訪問生は１２．５％）へのキャリア支援のあり方を考える。 (2)○個別の教育支援計画のＰＤＣＡサイクルの流れは保護者にも浸透し、日々の実践や個別の指導計画と連動した内容にすることができた。 ▲個別の教育支援計画のサーバー内の保管場所が、新転任の先生にわかりにくかった。 (3)○必要な児童生徒について、定期的な外部との情報共有と支援会議を実施し、一歩進めることができた。希望する卒業生には、移行支援会議で引き継ぎができた。 ○担任と連携し児童・生徒の家庭状況等に応じて、保護者と懇談したり担任・部主事とも情報共有したりして、組織として対応した。 ▲一部の生徒支援については、十分な引継ぎをして継続した支援が必要である。	A (B) C D

来年度に向けての改善方策案	・在宅訪問生の担任や訪問担当者会より保護者のニーズや困り感を聞き、情報収集と発信に努める。 ・個別の教育支援計画、個別の指導計画を、サーバー内の児童生徒名フォルダーに一緒に保存する。 ・総合ファイルロッカー内の個別の教育支援計画の写しは、進級時にそのまま綴じたままにし、過去を確認できるようにする。 ・校内及び進路支援にあたり担任と密に情報共有して、各部内や分掌のかかわる教員間で役割分担をしながら、継続して支援する。

分掌	病弱教育支援センター
現状及びアンケートの結果分析等	・小中学校及び高等学校、特別支援学校からの電話やメールでの相談に対してセンター職員やコア・ティーチャー等で連携して対応した。 ・高等学校からの依頼を受けて長期入院の高等学校生徒の遠隔教育に関わる支援会議や復学支援会議に出席した。 ・外部支援の状況をセンター会及び報告書により随時担当者間で共有し、組織として外部からの相談に対応した。 ・研究研修部と連携し、夏季公開職員研修会（オンライン配信）の周知や申込のとりまとめを行った。

	・病弱を対象としている県内の特別支援学校に、休校期間中に準ずる教育課程に在籍する病弱児童生徒に対して実施したオンライン学習支援等についてのアンケート調査を行い、結果を各校へ情報提供した（回答数：１１校）。 ・病弱教育担当者会での情報交換を希望した４校を対象としてオンライン会議を実施した。 ・コア・ティーチャーと連携して、病弱を対象としている県内の特別支援学校に、外部専門家による超重症児・重症心身障がい児への支援についての学習会をオンライン配信にて実施（４回）した。 ・令和３年度に当校への就学・入学を検討している幼児児童生徒・保護者・関係機関職員を対象とした学校見学を実施した。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	(1) 小・中学校及び高等学校の教員に対して病弱教育の支援を実施する。 (2) 特別支援学校病弱教育担当者のニーズに応える支援を積極的に実施する。 (3) 対象未就学児の保護者支援を関係機関と連携し積極的に行う。
重点目標を達成するための校内組織体制	・公開研修会等で他の分掌や係と連携し、業務を分担して、効果的な外部支援を行う。 ・外部支援の状況を管理職、センター職員、コア・ティーチャー、関係分掌職員等で共有し、迅速かつ丁寧に支援にあたる。
目標の達成に必要な具体的取組	(1) 小・中学校及び高等学校の教員に対して病弱教育の支援を実施する。 ①小・中学校や高等学校、市町教育委員会等へ電話や郵送での広報活動を実施する。外部支援として行っている相談支援や公開職員研修会、遠隔教育について広報する。 ②相談支援（電話・メール相談、訪問支援）では、センター職員及びコア・ティーチャー等職員の専門性を生かし、全校体制で支援を実施する。訪問支援が難しい状況では、オンライン相談も検討する。 ③病弱の特別支援学級をもつ８校へ積極的に連絡をとり、情報交換をする。 ④外部支援の状況を記録の回覧や会議での報告を通して担当者間で共有し、外部からの問い合わせ等には迅速に対応する。 ⑤圏域外の病弱教育に関する相談や異なる障がい種の相談に対しても、各特別支援学校の支援センターと協力し、丁寧に対応する。 (2) 特別支援学校病弱教育担当者のニーズに応える支援を積極的に実施する。 ①病弱教育担当者会や訪問教育担当者会、専門家による学習会の取組をオンライン配信で実施することで、特別支援学校病弱教育担当者の専門性向上への支援を行う。 ②病弱教育担当者会、訪問教育担当者会では、参加校からの意見を参考にしてテーマを設定し、情報交換・意見交流が活発になされるような運営を工夫する。オンライン会議を積極的に活用する。 (3) 対象未就学児の保護者支援を関係機関と連携し積極的に行う。 ①重症心身障がいや難病の幼児を対象としている療育機関に「幼児相談室」の活動内容や趣旨について説明し、連携して支援できる体制を作る。 ②相談では保護者の思いを聞き取り、ニーズに応じた情報提供や支援を行う。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	(1) 小・中学校及び高等学校の教職員に対する病弱教育の支援ができたか。 (2) 特別支援学校病弱教育担当者の専門性向上への支援ができたか。 (3) 未就学児の保護者への支援を関係機関と連携して行うことができたか。

取組状況・実践内容等	(1)・電話・メール相談やオンライン相談を実施した。外部支援の状況については担当者間で共有し、外部からの問い合わせ等には迅速に対応した。 ・県内小中学校病弱特別支援学級（８校）から現在の授業状況や原籍校との連携等について聞き取り、当校の相談支援活動について紹介を行った。 ・高等学校や特別支援教育課と連携し、長期入院の高等学校生徒の遠隔教育に関わる支援会議や復学支援会議に出席して情報提供をしたり、遠隔教育開始後の状況について情報共有したりした。 ・学校見学や夏季公開職員研修会等について、小中学校や高等学校、特別支援学校へ広報を行った。学校見学（オンライン実施）では、特別支援教育や当校の学校概要について説明を行った。夏季公開職員研修会（オンライン実施）では、研究研修部と連携して申込集約や研修会の運営を行った。 (2)・県内特別支援学校対象の病弱教育担当者会（年２回・８校参加）や訪問教育担当者会（年１回・８校参加）をオンライン会議にて実施した。また、コア・ティーチャーと連携して外部専門家による医療機器に関する学習会（年３回・７校参加）をオンライン配信で実施した。 (3)・令和４年度に就学・入学を検討している幼児児童生徒・保護者・関係機関職員を対象とした学校見学を実施した。 ・メールやオンラインを活用して就学についての個別相談を行った。

評価の視点	評価
(1)小・中学校及び高等学校の教職員に対する病弱教育の支援ができたか。	A (B) C D
(2)特別支援学校病弱教育担当者の専門性向上への支援ができたか。	(A) B C D
(3)未就学児の保護者への支援を関係機関と連携して行うことができたか。	A (B) C D

成果・課題	総合評価
(1)○電話・メール・オンライン相談では、センター職員やコア・ティーチャー等校内の職員の専門性を活用して支援することができた。 ○高等学校や病院、特別支援教育課と共に長期入院の高等学校生徒の遠隔教育に関わる支援や復学に関わる支援を行うことができた。小中学校の病弱特別支援学級とも連絡をとり、支援の状況を把握することができた。 ○夏季公開職員研修会をオンライン配信で実施し、遠方からも参加があった。内容的にもおおむね好評だった。 ▲小中学校の病弱特別支援学級や高等学校への病弱教育についての情報提供の方法や内容について検討できるとよい。 ▲夏季休業中の研修会の日程調整が難しくなるとともに業務の負担が大きくなっている。内容の精選や実施方法、役割分担の検討が必要である。 (2)○病弱教育担当者会、訪問教育担当者会、医療機器に関する学習会で、病弱教育についての情報発信や専門性向上のための支援を行い、参加者からも高評価を得た。各校で担当者が少ない分野であり、担当者からのニーズが高い。 ▲県内特別支援学校病弱教育担当者、訪問教育担当者のニーズを把握し、専門性向上の支援を継続する。 (3)○未就学児が通園している関係機関へ学校見学の案内を行った。関係機関職員と連携して対象幼児について把握し、保護者のニーズに応じた情報提供をすることができた。 ○個別の相談ではメールやオンラインで継続して相談を行い、保護者の思いを丁寧に聞き取って就学に関する情報提供をすることができた。	A (B) C D

来年度に向けての改善方策案	・夏季公開職員研修会については、センターは小・中学校、高等学校、関係機関への広報や参加者集約を担う。 ・病弱教育、訪問教育の担当者会については、参加者のニーズを踏まえ、実施期日や時間、内容（情報交換のテーマや実践紹介等）を検討して実施する。 ・関係機関と連携して難病や重症心身障がいの幼児の保護者に対しての支援方法を検討し実施する。